

ニ格・カラ格の交替について

村 松 由起子

I 本稿の目的

動詞と名詞との意味的な関係を表わす格の問題は、従来、様々な言語において取り上げられ、日本語においても格助詞について、早くから研究が進められてきた。最近では、格の関係を「必須的成分」と「副次的成分」に分けて捉える研究も盛んである。^(註1)

この、格助詞の問題のひとつに、助詞の交替問題があるが、本稿は、「に」と「から」の交替を取り上げ、その交替の成立不成立の条件を明らかにしようとするものである。

本稿で取り上げる「に」と「から」の交替は、次の三類の表現において問題とされる交替である。

- 1 「～てもらう」表現
- 2 受身表現
- 3 「借りる」「もらう」などの動詞を用いた表現

考察の手順は以下の通りである。

- II 「動作主」「起点」からの考察
- III 「受け手」からの考察
- IV 交替の成立不成立

II 「動作主」「起点」からの考察

II-1 ニ格・カラ格の交替

柴谷1978^(註2)は、ニ格・カラ格の交替を「動作主」「起点」という概念を用いて考察している。

柴谷は、ニ格で表わされる「動作主」が「起点」としても働いているとき、ニ格・カラ格の交替が可能であるとしている。

- ・ 太郎が山田先生に／から本を借りた。
- ・ 太郎は山田先生に／から英語を教えてもらった。
- ・ 菊子が嫁に来る時、女学校の級友たちに／から、世界の子守歌の組レコードを贈られた。

以上、三例は、柴谷が、ニ格とカラ格の交替が可能であるとしている例の一部である。

柴谷によると、これらの例でニ格とカラ格の交替が可能であるのは、「山田先生」「女学校の級友たち」が「動作主・起点」として働いているからである。

一方、「動作主」が「起点」として働いていない場合には、カラ格をとることはできないとしている。

- ・ 太郎が花子に／*から本をやった。
- ・ 僕は花子に／*から来てもらった。
- ・ 秋子が熊に／*から殺されました。

これらの例からみるかぎり、柴谷の説は、かなり妥当性の高いものだといえそう。

以下、この柴谷説で残されている問題を取り上げ、本稿で取り上げる「受け手」からの考察の必要性を明らかにしていく。

II-2 「起点」について

先にあげた柴谷の例文のうち、

- ・ 太郎は山田先生に／から英語を教えてもらった。

について考えてみよう。

柴谷は「山田先生」を「動作主・起点」と見なしている。つまり、「英語の知識」が「山田先生」から「太郎」に移動すると考えるわけである。

ここで問題になるのは、何を基準として「起点」とするかである。

柴谷は「動作主が起点としても働いていると見なされる為には、ものの移動が動作主を起点として具体的に起こっていなくてもよい^(注3)」とし、

・でもレイ子、これ葉脈標本やってさ、先生から褒められたよ。

などの例を挙げている。

ものの移動が動作主を起点として具体的に起こっていなくても「起点」と見なすことができるとなると「起点」という概念に曖昧さが出てくる。

しかし、「起点」の概念に「精神的・感情的起点」まで含めるとなると、「起点」として働き得るかどうかを判断するための基準を定めるのは難しくなる。

そこで、本稿は、「動作主」が「起点」として働いているかどうかを追及するのではなく、動作・行為の及ぶ相手、つまり、「受け手」に着目して、その動作・行為の及び方の違いから、ニ格・カラ格の交替を考察していく。

Ⅲ 「受け手」からの考察

Iの「本稿の目的」で挙げた三類の表現は、すべて「受け手」側からの表現である。

このことは、ニ格・カラ格の交替は「受け手」と何らかの関わりがありそうだとすることを示唆している。

ここでは、この「受け手」を中心に、ニ格・カラ格の交替問題を扱っていく。まず、本稿で用いる用語を規定しておく。

動作主： 動作・行為を及ぼす主体

受け手： 動作・行為が及ぶ相手

直接的受け手——動作・行為が直接及ぶ相手

間接的受け手——動作・行為が間接的に及ぶ相手

Ⅲ-1 ニ格しかとれない場合

まず、「～してもらう」表現からみていく。

次の(1)~(3)の例文では、「に」を「から」に置き替えることはできない。

- (1) 太郎は次郎に来てもらった。
- (2) 太郎は電気屋にテレビを直してもらった。
- (3) 太郎は医者にみてもらった。

(1)~(3)における「動作主」は、それぞれ、「次郎」「電気屋」「医者」である。「受け手」は、いずれも「太郎」であるが、(1)(2)と(3)では、「太郎」への動作・行為の及び方に違いがあり、(1)(2)の「太郎」は「間接的受け手」であるが、(3)の「太郎」は「直接的受け手」である。

(1)では、「来る」という行為が直接及ぶ相手は存在しない。

(2)では、「直す」という行為が直接及んでいるのは「テレビ」であり、テレビが「直接的受け手」になる。

- (1) 太郎 は 次郎 に来てもらった。
間接的受け手 動作主
- (2) 太郎 は 電気屋 に テレビ を直してもらった。
間接的受け手 動作主 直接的受け手
- (3) 太郎 は 医者 にみてもらった。
直接的受け手 動作主

次に受身文の例をみてみよう。

- (4) 太郎は子供の頃、母親に死なれた。
- (5) 太郎は車にひかれた。
- (6) 太郎は強盗に殺された。

(4)はいわゆる「間接受動文」といわれるもので、対応する能動文がないのが特徴である。^(註4)

(4)~(6)の動作主は、順に、「母親」「車」「強盗」であり、受け手はいずれも「太郎」となる。

しかし、(4)の「太郎」と(5)(6)の「太郎」には、明らかな違いがある。(4)の「太郎」は「間接的受け手」であり、(5)(6)の「太郎」は「直接的受け手」であるが、(5)(6)の「太郎」が「ひかれる」「殺される」ことによって、外見からもわかる状態的变化を受けているのに対して、(4)の「太郎」には、「死なれる」ことによる状態的变化はない。

- (4) 太郎 は子供の頃、母親 に死なれた。
間接的受け手 動作主
- (5) 太郎 は 車 にひかれた。
直接的受け手 動作主
- (6) 太郎 は 強盗 に殺された。
直接的受け手 動作主

この、「直接的受け手」が状態的变化を受けているかどうかという観点から、もう一度(1)~(3)の例文をみてもみると、(1)には「直接的受け手」は存在しないが、(2)(3)の「直接的受け手」である「テレビ」「太郎」は、「直してもらう」「みってもらう」ことによって、何らかの状態的变化を受けていると考えられる。

以上の考察から、「ニ格しかとれない場合」に現われる「受け手」の特徴を次のようにまとめることができる。

ニ格のみ	{	主語が直接的受け	→	直接的受け手に状
		手になる場合		態的变化がある
		主語が間接的受け	→	直接的受け手は存
		手になる場合		在しない

Ⅲ-2 ニ格・カラ格ともとれる場合

次に、ニ格・カラ格の交替が可能な場合を検討してみる。

- (7) 太郎は次郎に／から寄付金を出してもらった。
- (8) 太郎は次郎に／から席を譲ってもらった
- (9) 太郎は次郎に／から事情を説明してもらった。
- (10) 太郎は次郎に／からお金を出してもらった。

(7)~(10)の動作主は、いずれも「次郎」である。受け手は「太郎」であるが、(7)~(10)の「太郎」はいずれも「次郎」からの行為を直接受けている「直接的受け手」である。

これらの例文では、先の「ニ格しかとれない場合」とは違い、「直接的受け手」は「動作主」の行為による状態的な変化を受けていない。

では、ニ格・カラ格の交替ができる場合で「太郎」が「間接的受け手」になることはないのでしょうか。

(11) 太郎は次郎に／から息子を叱ってもらった。

(11)では、動作主である「次郎」の行為が直接及んでいる「直接的受け手」は「息子」であり、「太郎」は「間接的受け手」になる。

ここでも、「直接的受け手」は、動作主の行為によって状態的变化はうけていない。

(11) 太 郎 は 次 郎 に／から 息 子 を叱ってもらった。
間接的受け手 動作主 直接的受け手

以上(7)~(11)の例文から、ニ格・カラ格の交替が可能な場合、「直接的受け手」は状態的变化を受けていないとしてさしつかえなさそうである。

但し、次の(12)のように「直接的受け手」がニ格をとる場合は、「動作主」がニ格をとると、ニ格が重複するため、それを避けるために「動作主」はニ格よりもカラ格をとりやすいといえそうである。

(12) 太郎は次郎に／から先生に伝えてもらった。

次に受身表現をみてみよう。

(13) 太郎はクラスメートに／から代表に選ばれた。

(14) 太郎は次郎に／から好かれている。

(15) 太郎は次郎に／から調査を頼まれた。

(16) 太郎は次郎に／から笑われた。

(13)~(16)の「太郎」は、すべて「直接的受け手」である。そして、「～てもら

う」表現で予測したように、ここでも、「直接的受け手」である「太郎」は、「動作主」の行為によって、状態の変化を受けていないことがわかる。

つまり、二格・カラ格の交替が可能である場合の「直接的受け手」は状態的变化を受けていないとするのは、かなり妥当性が高いとみてよからう。

以上のことをまとめると、次のようになる。

二格・カラ格 の交替が可能	主語が直接的受 け手である場合	→	直接的受け手に状態的变化は
			ない
	主語が間接的受 け手である場合	→	直接的受け手が存在する
			直接的受け手に状態的变化はない

Ⅲ-3 カラ格しかとれない場合

「～てもらう」表現、受身表現では、「動作主」は二格で表わされる。ところが、二格を許さずカラ格のみをとるのは、カラ格に先行する名詞が「動作主」として働いていないからである。次の例からも明らかであるように、カラ格しかとれない「図書館」は「動作主」ではない。

(19) 太郎は（次郎に）図書館から本を借りてもらった。

「～てもらう」表現、受身表現において、カラ格しかとれない名詞句が存在する場合、(19)のように、カラ格の名詞句とは別に、二格をとる「動作主」が存在すると考えてよい。

しかし、受け手側からの表現でも、授受動詞を用いた表現のなかには、二格をとる名詞句がない場合もある。

(20) 太郎は次郎から荷物を預かった。^(注5)

次のⅢ-4では、授受動詞を用いた表現についてみていく。

Ⅲ-4 授受動詞を用いた表現

二格とカラ格の交替を許す授受動詞には、次のようなものがある。

借りる、習う、教わる、もらう、聞く など

これらのうち、ここでは、「貸す——借りる」を取り上げ、何故、「貸す」は二格しかとれず、「借りる」は二格・カラ格の交替が可能であるのかについて、考察を進める。

(17) 太郎は次郎にレコードを貸した。

(18) 太郎は次郎に／からレコードを借りた。

(17)と(18)では、(17)が、「レコード」の送り手側からの表現であるのに対し、(18)は、「レコード」の受け手側からの表現である。

受け手側からの表現である(18)では、行為の「直接的受け手」である「次郎」が状態的变化を受けていないので、前述した「～てもらう」表現や受身表現と同様に、二格・カラ格の交替が可能である。

一方、送り手側からの表現である(17)では、行為の「直接的受け手」である「次郎」が状態的变化を受けていないにもかかわらず、カラ格をとることができない。

このことから、「直接的受け手」が状態的变化を受けているかどうかという基準で、二格・カラ格の交替の成立不成立を決定できるのは、受け手からの表現に限られることがわかる。

IV 交替の成立不成立

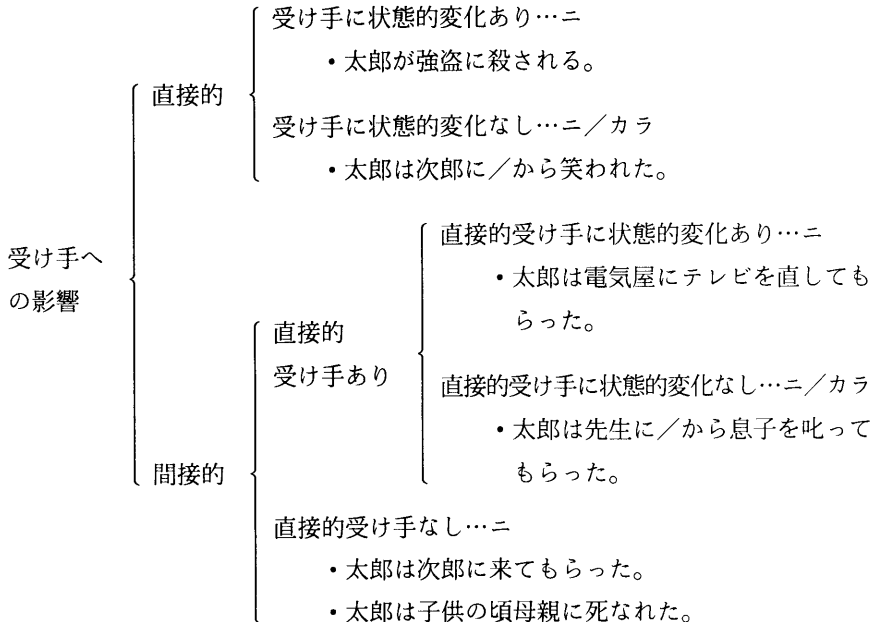
本稿での考察をまとめると次ページのようになる。

V まとめ

本稿は、二格とカラ格の交替を考察するにあたり、柴谷の「動作主」が「起点」として働くか否かを出発点とした。

本稿においては、新たに「受け手」の概念を導入し、上述の三類の表現がすべて、受け手側からの表現に限られることを前提に、柴谷の「動作主」が「起点」として働くと見なされる基準を、動作・行為の受け手への及び方という視点から、

さらに、『動作・行為を直接受ける受け手が存在し、その受け手が状態的变化を受けているとき、「動作主」は「起点」として働いていると見なされる』と規定することによって、ニ格とカラ格の交替の成立不成立の条件を明らかにした。



(但し、受け手側からの表現に限る)

注

注1：寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版 P.82 「必須補語」「副次補語」

森山卓郎 1988『日本語動詞述語文の研究』明治書院 P.57 「必須的な格成分」「副次的な状況成分」

注2：柴谷方良 1978『日本語の分析』大修館書店 P.297~309

注3：柴谷方良 1978 P.303

注4：柴谷方良 1978 P.133~142

村木新次郎 1989「ヴォイス」『講座日本語と日本語教育4』明治書院 P.173~184

注5：例文⑳の「預かる」は、「貸す——借りる」のように「預ける——預かる」とい

う語彙的な対立を持つが、「預かる」は「借りる」とは違い、二格をとることができない。

二格・カラ格の交替が可能な授受動詞の種類については、さらに考察が必要であると考える。

(むらまつ ゆきこ 日本言語文化 前期課程)